

■「産農人」とは農作物をつくるだけでなく、市場ニーズを理解し流通させることのできるマーケットセンスを持った新しい農業人を表す造語。横須賀商工会議所と地域の農家・加工業者・飲食店・メーカーが一丸となって、将来の農業を担う有用な人材の育成に取り組んでいます

産農人 3・4期生

次世代農業の主役たち

新時代の農業人に求められるのは、環境との調和を図りながら力強い農業経営を確立させること。現場実習を中心に、生産・加工・流通を広い視野で総合的に学んでいる3・4期生メンバーを紹介!



「産農人」で自己探索 結城七菜香さん (2年)

漠然とした農業への憧れが参加理由という。畑に足を踏み入れた瞬間、土の匂いと感触に胸が躍った。その一方で、地味で細かな作業の連続に加え、体力的な厳しさを身を持って体験。美味しさと安全性を追求する農家の心意気にも触れ、仕事としての農業を少しずつ意識し始めたところだ。



農業とどう向き合うか 飯島あゆみさん (3年)

教科書や机上で学ぶよりも、現場に飛び出して畑作業に没頭していたタイプ。2年目を迎えた今もその思いは変わらないうが、「生産・流通・販売」に携わる新しい農業のカタチを学ぶ意義を「産農人」のプログラムを通して理解した。これを自身の進路選択とどう結びつけるか、思索の1年になる。



農業に従事、決意新たに 大沼侑太さん (3年)

4期生を引っ張るリーダー的存在。宮城県で米づくりと花き栽培を行っている。昨年は加工品開発でも能力を発揮。バターナッツかぼちゃを用いたチーズケーキの試作品が高い評価を得た。農業から広がるビジネスの可能性にも視野を広げ、将来に役立てるつもりだ。



姉弟で家業を進化させる 長島諒治さん (2年)

家業のイチゴ農園を継ぐと決めている。現在は生産販売と観光農園を主力としているが、将来的には加工商品の販売にも乗り出す考え。イチゴを使ったスイーツの開発やフリーズドライの可能性などにも考えを巡らせている。2期生として学んだ姉と将来を語ることが多くなった。姉弟で家業を進化させる。



インスタで「農業萌え」 須田萌愛さん (2年)

「産農人」の活動をSNSで発信している。Twitterは「JK(女子校生)ファーマーズ」。自分が見たものや感じたことと飾ることなく伝えている。「投稿画像から農業の楽しさや魅力を感じ取ってもらえたら」と弾ける笑顔。県内の特産品にも興味を持っており、風土や伝統についての調べも進めている。



6次産業化に興味津々 佐藤あかりさん (2年)

6次産業化を学ぶ目的で「産農人」の門を叩いている。大学で栄養学を学んでいる兄が目下のライバル。産地の食材を用いた総菜をスーパーで販売する取り組みに刺激をもらっている。将来は大学に進学して農業と食を深めたいという。



「農業のリアル」知りたい カルドソガブリエル・ヘンリケ ナチイビダトさん (2年)

中学3年の秋、旅先の北海道で米農家が手掛けた新米の味に感動を覚え、農業に興味を湧かした。普通科高校から農業高校に進路変更、将来を見据えて真剣に学んでいる。「産農人」への参加は入学前から決まっていた。授業では知らない、できない、農家のリアルな仕事や生活を知ることが目的だ。



畑に笑顔振りまく 水野綺音さん (2年)

農業の楽しさを見つけたことが参加動機だ。消極的な性格を変えたいとの思いもあり、これまでの思いもあり、これまでの実習は毎日新しい発見ばかりで飽きることがない。須田さんと一緒に発信にも取り組むなど、新風を吹かせている。



「農業×音楽」異能の人 三上隼馬さん (2年)

料理人を志し、素材に合わせた理解を深めようと参加を決めた。一方で、作曲を中心とした音楽活動にも精力的に取り組んでおり、多忙な毎日を送っている。「やりたいことが多すぎて将来の夢を絞り切れないのが悩み」。畑作業からインスピレーションを得た「産農人」のテーマソングづくりに挑戦中だ。